

報告番号	※甲	第	号
------	----	---	---

主論文の要旨

論文題目

早産で出生した幼児の養育の特徴とその関連要因の検討
ー食に関する養育についての親の認識アセスメントツールの作成と活用ー

氏名 茂本 咲子

論文内容の要旨

I. 緒言

医療の発展に伴い、在胎 37 週未満の早産児が救命されるようになった。早産で出生した幼児は低身長や言葉の発達の遅れを伴いやすいこと、将来メタボリックシンドロームを発症するリスクが高いことが指摘されている。

早産児の母親は、この子とともに生きている一体感や育児行動獲得への試行錯誤を体験している。早産児の体や食が細いことを心配し、食べさせようとする母親との関わりを通して、親子の相互作用を支え、早産児の成長・発達を支える看護について検討する必要があると考えた。親の認識アセスメントツールの作成と活用は、親の感じ方や考え方を親と看護師が共有することを助けると考えられる。

修士論文では、早産児の母親の育児困難感は正期産児と比較して有意差はなく、母子関係や医療者の支援に対する母親の認識と関連していることが明らかにされた。そこで、博士論文では、毎日の親子の営みであり、子どもの生命や成長・発達に直結する食に着目し、幼児一般の養育についての親の認識アセスメントツールを作成し、その枠組みにおいて早産児の養育の特徴とその関連要因を明らかにすることにした。

II. 目的

調査 1

食に関する幼児の養育についての親の認識アセスメントツール（Parental Perception of Toddler and Preschooler Feeding Assessment Tool, 以下、PPTPFAT）を作成する。

調査 2

PPTPFAT を活用して、早産児の養育の特徴とその関連要因を明らかにし、早産児の養育を支える看護の示唆を得る。

Ⅲ. 対象および方法

1. 対象と調査手順

調査 1

まず、文献検討、小児看護の実践者と研究者によるスーパーバイズ、幼児の両親によるプレテストの結果をもとに、子どもへの応答性、食習慣の発達促進、健康に向けた食の提供、摂食の促進の 4 要素、27 項目からなる原案を作成した。

次に、自記式質問紙調査を実施した。対象は 1 歳から就学前の主な養育者で、調査内容は属性、PPTPFAT 原案 27 項目、食事中の子どもの反応（以下、CR）3 項目、荒木らが開発した育児ストレスショートフォーム（以下、PSI-SF）19 項目とした。保健センターと公立小学校各 2 か所で調査を行った。

調査 2

対象は①在胎 37 週未満、②2 歳以降就学前、③気管切開や胃瘻等の医療的ケアを実施していない幼児の養育者とした。対照群は、調査 1 の正期産（在胎 37～41 週）児のうち、早産児の性別と年齢±1 歳でマッチングして抽出した。

5 施設の小児科外来で、調査 1 および早産児の状態に関する質問紙調査を行った。吉村らが開発した食事摂取頻度調査（以下、FFQg）では可能な限り聞き取り調査を行った。

2. 分析方法

SPSS を使用して記述統計、探索的因子分析（主因子法、プロマックス回転）、相関係数とクロンバック α 係数の算出、t 検定およびノンパラメトリック検定、重回帰分析ステップワイズ法を行った。有意水準は 5%とした。

3. 倫理的配慮

研究者また施設管理者が対象者に、研究目的と方法、研究参加は自由意思によること、調査協力の有無によって不利益が生じないことを文書と口頭で事前に説明した。聞き取り調査はプライバシーが保護される場所で行った。無記名自記式質問紙および FFQg のデータには個人が特定されない記号をつけて連結できるようにし、鍵付き収納庫に保管して、研究終了後に破棄した。

名古屋大学医学部保健学科の生命倫理委員会の承認を受けた。また、必要に応じて調査施設の倫理委員会の承認を受けた。

Ⅳ. 結果

調査 1

幼児の母親 209 名、父親 4 名、計 213 名を分析対象とした（有効回答率 37.3%）。平均年齢は 34.3 ± 4.8 歳だった。再テストの分析対象は 41 名だった。

因子負荷量 0.45 以上を採択基準とし、最終的に 4 因子 18 項目を採択した。PPTPFAT 総得点と各因子の得点間に有意な相関が認められた。

7 項目からなる Factor（以下、F）1 を【子どもが自発的に食べることを支える】、4 項目からなる F2 を【健康に配慮して食生活を調整する】、5 項目からなる F3 を【行儀のよいふるまいを求める】、2 項目からなる F4 を【子どもの欲求を理解する】と命名した。

PPTPFAT 総得点のクロンバック α 係数は 0.83、再テスト信頼性係数は 0.89 だった。PPTPFAT 総得点は、5～6 歳児群、女兒群、子どもの反応高得点群の方が有意に高く、

PSI-SF と負の相関が認められた。

調査 2

早産児の母親 76 名を分析対象とした（有効回答率 65.0%）。平均年齢は 35.3±4.4 歳だった。早産児の出生週数は 23～36 週，出生体重は 314～2024g，調査時の平均年齢は 3.1±1.2 歳だった。

PPTPFAT 総得点および F1～F4 得点は，早産児と正期産児で有意差は認められなかった。

PPTPFAT 総得点を従属変数とした重回帰分析では，CR，幼児の年齢，PSI-SF の順に投入された。また，園職員の育児あり群の方が，総得点，F3，F4 得点が高く，子ども 2 人以上群で F1 得点が高かった。さらに，3 歳以下の早産児では，F1 と子どもの体重，F1 とエネルギー摂取量，F4 と魚介肉類豆製品摂取量間に正の相関，4 歳以上の早産児では，F3 と乳乳製品卵の摂取量，F3 とエネルギー摂取量間に負の相関が認められた。

V. 考察

調査 1 より，親の視点から作成された PPTPFAT は，食に関する幼児の養育についての親の認識をアセスメントするツールとしてのある一定の信頼性・妥当性が確認された。PPTPFAT の活用により，親と看護師が共通の視点で親の養育をとらえ，互いに共有することが可能になる点で意義があると考えられた。とりわけ，既存の尺度にみられない F1 をとらえることにより，子どもの反応や自発性についての親の気づきを助ける点が有意義である。

調査 2 では，PPTPFAT は早産児と正期産児で有意差はなく，早産児を対象とした看護実践や研究に用いることができると示された。PPTPFAT の関連要因の検討から，早産児の親が『子どもの育ちの実感』や『子どもの育ちを支えるサポートの実感』をもち，F4 や F1 を実感することが重要だと考えられた。F3 の養育では，子どもの食事摂取量が減少する可能性がある。F1 の養育により，早産児の健やかな成長・発達が進められると考えられた。

V. 結語

1. 幼児一般の親を対象に作成した PPTPFAT は，4 因子【子どもが自発的に食べることを支える】【健康に配慮して食生活を調整する】【行儀のよいふるまいを求める】【子どもの欲求を理解する】，18 項目で構成された。
2. 親の視点から作成された PPTPFAT は，食に関する幼児の養育についての親の認識をアセスメントするツールとしてのある一定の信頼性・妥当性が確認された。PPTPFAT の活用により，親と看護師が共通の視点で親の養育をとらえ，互いに共有することが可能になる点で意義があると考えられた。
3. 早産児の PPTPFAT 得点は正期産児と比べて高くはないこと，その主な関連要因は，子どもの反応，子どもの年齢，育児ストレスであることが明らかにされた。
4. 3 歳以下では，F1 は早産児のエネルギー摂取量および体重が高いことと，F4 は早産児の魚介肉類豆製品の摂取量が高いことと有意な関係があった。4 歳以上では，F3 は早産児の乳乳製品卵およびエネルギー摂取量が低いことと有意な関係があった。
5. 早産で生まれた幼児を対象とした看護実践において PPTPFAT を活用することにより，早産児の親が『子どもの育ちの実感』『子どもの育ちを支えるサポートの実感』をもち，F4 や F1 を実感することが重要だと考えられた。